２０１８　SUPER　FORMULA
JMS P.MU / CERUMO・INGING Race Report

第７戦　鈴鹿サーキット

◆ 10 月 28 日 (日)　< 決勝 >　天候：晴れ　｜　コース状況：ドライ

＃１　石浦　宏明　11 位　／　＃２　国本　雄資　４位

全日本スーパーフォーミュラ選手権第 7 戦の決勝レースは、JMS　P.MU／CERUMO･INGING の国本雄資が、ピット戦略もはまり予選 9 位から表彰台獲得目前の 4 位でゴール。石浦は 11 位でフィニッシュし、シリーズランキング 3 位で 2018 年シーズンを終えることとなった。

雨雲に覆われた曇り空で始まった予選日から一転、決勝日は気持ちの良い晴天となった。午前 8 時 45 分から始まったフリー走行はドライコンディションで、石浦はソフトタイヤでのロングランを中心に走行。国本はミディアムタイヤでのロングランとメニューを変えて 30 分間のセッションをこなした。

日差しはさらに強まり、決勝レースが始まる頃には気温 25℃、路面温度は 30℃まで上昇。汗ばむほどの陽気のなかで決勝レースがスタートした。11 番グリッドの石浦は、スタートダッシュでのポジションアップを狙ってソフトタイヤを選択。一方の国本は作戦を変えてミディアムタイヤでのスタートを選択した。石浦はまずまずのスタートを切って、オープニングラップで 1 ポジションアップ。しかしここからは前後に他のマシンがいることで思うようなペースで走れず、膠着状態が続く。クリーンなスペースで追い上げたい石浦は、9 周を終えてピットに戻り、ミディアムタイヤに交換。狙い通り、周囲に他のマシンがいないスペースでコース復帰に成功すると、再び追い上げを開始した。ピット作業を済ませた中では先頭で周回を重ねる石浦。12 周目にはレース中の自己ベストタイムとなる 1 分 43 秒 832 をマークするが、それ以降はペースに苦しむ展開に。早めのピットインでタイムを稼ぐアンダーカットの作戦を狙っていたが、上位陣がピット作業を終え

たところでも逆転はかなわず、全車が作業を終えた 34 周目には予選順位と同じ 11 位に戻った。終盤は背後から福住仁嶺選手に迫られたが、なんとかしのぎ切ってチェッカーを受け、11 位でフィニッシュした。タイトル争いでは、ランキング 3 位だった山本尚貴選手がポール・トゥ・ウィンを飾ったことで逆転チャンピオンに。石浦は 3 位となった。

ミディアムタイヤでのスタートとなった国本は、ソフトタイヤを選んだ後続のマシンに先行され、14 番手からレースを始めることに。ガソリンの搭載量が多い序盤はなかなかペースが上がらなかったが、周回数が進み燃料が軽くなってくるにつれてペースアップ。ピットインのタイミングを後半まで引っ張り、32 周を終えてピットイン。ソフトタイヤに交換したあとは、暫定 7 番手でコースに戻った。34 周目に 1 分 42 秒 297 の自己ベストタイムを記録すると、35 周目にはシケインの混戦をすり抜け 6 番手に浮上。続く 36 周目に入った 1 コーナーでさらに 1 台をかわして 5 番手となる。ペース良く周回を重ねた国本は、42 周目のシケインでもう 1 台をかわして 4 番手に。残り 1 周で表彰台圏内の 3 番手を 0.3 秒まで追い詰めた。残念ながら僅差で逆転はかなわなかったが、数々のバトルをみせ、予選順位から大きくポジションアップした 4 位で今シーズンの最終戦を締めくくった。国本の 4 位入賞でチームタイトル争いでは 5 ポイントを加算。チームランキングは 2 位となった。

残念ながら、3 年連続のチームタイトル、そして 4 年連続のドライバーズタイトル獲得は果たせなかったが、チャンピオンチームとして得た経験と実績を生かし、新型マシンで戦う 2019 シーズンに向け、再びタイトルを奪回できるチーム作りに邁進していく。

ドライバー／#1　石浦　宏明

「普段、僕たちは朝のフリー走行でマシンの状態を確認しながら、レースペースが速いことを前提に作戦を考えるのですが、今朝は極端にペースが悪く、4 位でゴールできた開幕戦のセットアップに変更してレースに臨みました。スタートはうまく決まりましたが、その後は基本的には、ブレーキに違和感があり、前を追うというよりも後ろに追われるというペースでしか走れず、レースをしたという感じがあまりなかったです。昨日からエンジニアと一緒にデータを見ていたので、そこでもっと僕が正しくインフォメーションをしておけば気づけた問題もあったかなと思うので、今回は実力不足。流れを持ってくることができませんでした。初めてチャンピオンを取った翌年も、最終戦まで争った結果、連覇ができませんでしたが、それがパワーになってその翌年に 2 度目のタイトルを獲ることができました。今回も連覇できなかったのは悔しいですが、この悔しさをパワー

にして、また頑張っていきたいと思います。応援ありがとうございました」

ドライバー／#2　国本　雄資

「今朝はトラブルも抱えていてクルマのバランスも悪く、決勝に向けては不安もありましたが、そこからウォームアップまでにチームがクルマを仕上げてくれていい方向に進んだし、グリッドでも少しアジャストしましたが、それもうまくはまりました。スタートは今年一番と言っていいぐらい悪かったのですが、ガソリンが軽くなってからはペースも上げられたし、ミディアムタイヤで引っ張るという作戦も良かったです。あと 1 周あれば 3 位に上がれるチャンスはあったと思うので残念ですが、9 番スタートから 4 位まで挽回できていいレースでしたし、最後まで楽しんで走ることができました。応援ありがとうございました」

監督／立川　祐路

「国本は、スタートで失敗してしまいましたが、よく挽回してくれました。たくさんのマシンを抜いてきての順位なので、いいレースだったと思います。一方、石浦に関してはクルマに問題があったのか、朝からペースが良くなく、それがすべてでした。チャンピオンシップを考えると非常に残念な結果ではありますが、まずは山本選手と KONDO RACING を祝福したいと思います。ただ、僕たちも勝つためにレースをしています。来年は、今度はチャレンジャーとしてきっちりと戦っていきたいと思います。今シーズンもたくさんの応援をありがとうございました」

総監督／浜島　裕英

「国本は、最後のセットアップが効いたようです。朝は良くなかったのですが、最後のウォームアップでようやく戻ってきた、とコメントしていました。ピット作業も良かったですし、ミディアムタイヤで引っ張っていた時も速いタイムが出ていて、ドライバーは本当に頑張ってくれました。石浦はクルマに問題があったようなので、これから分析して二度と同じ状況にならないようにしていきます。残念ながらドライバーズタイトル、チームタイトルを逃すことになりましたが、来年に向けて、もう一度ゼロからスタートしたいと思います。応援ありがとうございました」

【正式決勝結果】(上位 11 台抜粋)

Pos.	No.	Driver	Type	Car	Time / Behind
1	16	山本　尚貴	Honda HR-417E	TEAM MUGEN SF14	1:14’40.652
2	3	ニック･キャシディ	TOYOTA R14A	ORIENTALBIO KONDO SF14	0.654
3	4	山下　健太	TOYOTA R14A	ORIENTALBIO KONDO SF14	27.871
4	2	国本　雄資	TOYOTA R14A	JMS P.MU/CERUMO･INGING SF14	28.222
5	36	中嶋　一貴	TOYOTA R14A	VANTELIN KOWA TOM’S SF14	30.098
6	17	塚越　広大	Honda HR-417E	REAL SF14	34.982
7	6	松下　信治	Honda HR-417E	DOCOMO DANDELION M6Y SF14	35.544
8	19	関口　雄飛	TOYOTA R14A	ITOCHU ENEX TEAM IMPUL SF14	36.546
9	5	野尻　智紀	Honda HR-417E	DOCOMO DANDELION M5S SF14	1’01.392
10	50	千代　勝正	Honda HR-417E	B-Max Racing SF14	1’01.796
11	1	石浦　宏明	TOYOTA R14A	JMS P.MU/CERUMO･INGING SF14	1’03.865

ドライバースタンディング

(上位 5 名抜粋)

Pos.	No.	Driver	Point
1	16	山本　尚貴	38
2	3	ニック･キャシディ	37
3	1	石浦　宏明	25
4	19	関口　雄飛	18
5	20	平川　亮	17
9	2	国本　雄資	11.5

チームスタンディング

(上位 5 チーム抜粋)

Pos.	Team	Point
1	KONDO RACING	47.5
2	JMS P.MU/CERUMO・INGING	35.5
3	TEAM MUGEN	33
4	ITOCHU ENEX TEAM IMPUL	33
5	DOCOMO TEAM DANDELION RACING	18.5